



“慣れるということ”

園長 高杉 洋史



昨年の今頃は多くの時間を新型コロナウイルスの情報の情報収集に費やしていました。毎日の感染者数の増え方から、2週間後とか4週間後のことを考えていました。入園式はいつできるのだろうかとか、自分をはじめ身近な人が感染したらどうなるのだろうかとか、不安だけが膨らみ、何から手を付けていいかわからない毎日でした。そのころ買い込んだ非常食の缶詰とか塩や砂糖の袋を見るにつけ、あの頃はマスクも品薄のうえ結構な金額だったことを思い出します。桜の花もチューリップの花もいつ咲いたのか記憶が定かではありません。あれから一年、私自身もマスクの生活に慣れました。状況はウイルスが変異し感染力も強くなってきており、もつともつとストレスがたまるはずなのですが、外出を減らし手洗いがいに気を使い、ほかの人と話をするときも適度な距離を取れば何とか生活できることに慣れました。

さて、この生活が子どもたちにどんな影響を及ぼすか考えるのが、幼稚園の先生の仕事です。大人がマスクを手放せない現状では、子どもたちがどうやって先生の表情を読み取るかを考えないといけません。私事で恐縮ですが、同じような背丈で、髪型も似ている先生の後ろ姿の見分けがつかないことは頻繁に起きます。

子どもは大人の口元をみながら言葉を覚えると言われていますので、マスクは必要最小限のほうが良いという意見もあります。

大人はマスクをすることが常識になった今日この頃、子どもたちに接している私たちは口元を見せられない分、身振り手振りを大きくして、自分の気持ち、子どもたちに伝わりやすくし、言葉かけも増やすように心がけています。マスクをすると声の大きさも影響を受け、質感も変化します。根本的な対策は打てませんが、少なくともこのような現状であることを忘れないようにしようと思っています。

この状況に慣れないとストレスにつぶされるし、慣れすぎて、今が普通ではないことを忘れるのも危ないことだなと思っています。園児はもちろん保護者の皆様ご家族が楽しい毎日を過ごせるよう教諭全員で知恵を絞っている毎日です。

